

「フォローアップ研究から見えてきたこと」

金澤忠博 (大阪大学大学院人間科学研究科教授)

我々は、大阪府立母子保健総合医療センターと共同で、1990年から現在に至るまで20年以上にわたり、平均年齢8歳の超低出生体重児（出生体重<1000g）約500名の長期予後調べてきた。その結果、WISC-III、ASSQ、PRSやLDI、ADHD-RSといった心理尺度を用いることにより、自閉症スペクトラム障害、学習障害、注意欠陥多動性障害などの発達障害が疑われる児が高率で認められることを報告してきた。また、子どもに直接答えてもらうコンピテンス尺度や学校生活における仲間関係を問う質問紙などにより、発達障害の症状を示す児が、他児に比べて、いじめられることが多く、自尊心の低下が見られ、集団生活への適応に問題が生じやすいこと、とりわけ自閉症スペクトラムの症状を示す児にその傾向が顕著に見られることを報告してきた。

最近では、診断技術の進歩により自閉症スペクトラムなどの発達障害を早期に発見し、早期に支援することができるようになってきており、自閉症スペクトラム障害の特性に合わせた療育も様々なアプローチが試みられ、効果的な発達支援が可能になってきている。

しかし、極・超低出生体重児に自閉症スペクトラム障害が多いという報告が国内外で聞かれるようになったのは最近のことであり、学齢期に至っても未診断の児が多く、療育を含め適切な支援がなされているとはいえないのが実情である。低出生体重児における発達障害の早期発見と早期支援の重要性を、ここに強く訴えたい。

また、カンガルーケアという、出生直後に母が子を肌と肌を直接触れ合わせて抱く育児法は、実証研究により母子の安定した絆の形成を促すことがわかってきた。カンガルーケアは低出生体重児に比較的多いとされる被虐待の予防にもつながると考えている。

プロフィール

金澤忠博 (かなざわ・ただひろ)

1989年、大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程修了。大阪大学教務職員を経て同大助手となり、1998年11月に論文「学齢期における超低出生体重児の心理・行動研究」により、博士(人間科学)の学位を取得。梅花女子大学助教授、同大教授を経て、2008年10月より大阪大学大学院人間科学研究科 比較発達心理学分野教授。日本心理学会理事、フォローアップ研究会常任幹事、大阪自閉症研究会運営委員。臨床心理士、臨床発達心理士。

